施餓鬼法における「甘露陀羅尼」の梵字表記について(1)

金本拓士

はじめに

これまで伝法院では、『伝法院選書』における一連のシリーズとして「智山の真言」を発刊してきたが、平成二十七年からは、智山派発行の『作法集』におさめられている諸次第の真言・陀羅尼を中心とした解説を目指して研究を進めている。

この『作法集』の中には、現在真言宗寺院においてよく修法されている「引導法」と並んで「施餓鬼法」がある。そして「施餓鬼法」は、真言行者が日々餓鬼供養のために勤められるべき修法であるとされる。

『作法集』における「施餓鬼法」は、成賢の『薄雙紙』や守覚の『秘鈔』(2)などに基づいているものであるが、その次第の典拠となるものが、不空訳『施諸餓鬼飲食及水法并手印』(以下「及水法」)である。

この「及水法」にはいくつかの真言・陀羅尼が説かれているが、その中には「無量威徳自在光明殊勝妙之力加

持飲食陀羅尼」のように、不空訳の『仏説救抜焔口餓鬼陀羅尼経』の陀羅尼からきているものもあれば、「普集印呪」や「咽喉呪」など出所が判然とせず、またその陀羅尼の漢音写ならびに梵字の意味もはなはだ不明瞭なものもある。

本論文で取り上げようとする「甘露陀羅尼」も、その出所が明確ではないが、漢音写ならびに梵字表記が記載され、そこから意味をくみ取ることができ、この表記にしたがって田久保周誉師をはじめとして高橋尚夫師に到るまで幾人かの学匠が、サンスクリット語のローマナイズ化をし、和訳をつけて解説している。

しかし「甘露陀羅尼」を調べてみると、同様の陀羅尼をいくつか見出すことができ、その中で漢音写と梵字表記がされているのは『瑜伽集要焔口施食儀』（以下「施食儀」）であり、その「施甘露真言」が「及水法」の梵字表記と相違していることが明らかとなった。また『仏説妙色陀羅尼経』（以下「妙色陀羅尼」）[3]における陀羅尼の中にも「甘露陀羅尼」とほぼ同じ内容の陀羅尼が見出され、この経典のチベット語訳と見なされている *Suripa zhes bya ba'i gzungs* (*Suripa nāma dhāraṇī*)[4]を参照すると、やはり「及水法」の陀羅尼の梵字表記と相違し、「施食儀」の梵字表記と一致しているのである。

以上のことから、本論は、これまでの「及水法」における「甘露法味真言」の梵字表記とその梵字による和訳が妥当なものかどうかを「施食儀」ならびに「妙色陀羅尼」と比較検討し考察するものである。

1、「甘露陀羅尼」の梵字表記について

最初に大正蔵所収の「及水法」の「甘露陀羅尼」の記述を見ておく。

又蒙甘露法味の真言を誦して、施無畏の印を作せ。右手を以て臂を竪て、五指を展べて直ぐ上る即ち是れなり。真言に曰わく、

曩莫　蘇嚕頗也怛他蘖多也

怛爾也他唵　蘇嚕　蘇嚕　鉢羅蘇嚕　鉢羅蘇嚕　娑嚩二合賀引

前の施無畏の印を作して、此の呪施甘露真言一七返を誦せよ。能く飲食及び水をして変じて、無量の乳及び甘露と成る。能く一切の餓鬼の咽喉を開き、能く飲食をして、広く増多なることを得、平等に喫することを得しむ。⑤［漢文書き下しは、『秘密儀軌大系Ⅳ　施餓鬼法』四季社　九十五頁～九十七頁による。］

ここで表記されている梵字にもとづいて、田久保師をはじめとして幾人かの学匠がサンスクリット語のローマナイズをして、和訳を付けてきた。以下代表的なものをあげておく。

［田久保　一〇四頁下］

namaḥ surūpāya tathāgatāya tadyathā oṃ sru sru prasru prasru svāhā

「妙色身如来に帰命し奉る。即ち（呪を稱ふれば）唵、速やかに流出したまへ。速やかに流出したまへ。速やかに遍流出したまへ・娑嚩訶」

［教化資料　一六一頁］

Namaḥ surūpāya tathāgatāya tad yathā oṃ sru sru prasru prasru svāhā

「妙色身如来に帰命したてまつる。さて、オーン。出でよ。出でよ。現前せよ。現前せよ。（甘露味よ）。成就あれかし。」

［要集解説　二九七頁］

namaḥ surūpāya tathāgatāya tadyathā oṃ sru sru prasru prasuru svāhā /

「妙色身如来に帰命し奉る。即ち（呪を稱ふれば）唵、速やかに流出したまへ。速やかに流出したまへ。速やかに遍流出したまへ・娑嚩訶」

［高橋　一九三頁］

namaḥ surūpāya tathāgatāya tadyathā oṃ sru sru prasru prasuru svāhā /

「妙色身如来（阿閦如来）に帰命し奉る　すなわち　オーン［甘露が］流れ出よ　流れ出よ　現れ出よ　現れ出よ　スヴァーハー」

これらの「甘露陀羅尼」のサンスクリット語のローマナイズに大きな違いはない。おそらく教化資料、高橋両師は、田久保説のローマナイズに準拠したものと思われる。なぜなら実際の梵字表記は𑖭𑖽𑖭𑖽𑖨𑖽𑖭𑖽𑖨𑖽𑖭𑖽（…srū srū prasrū prasrū …）であるが、サンスクリット文法に合わせるために、srū を、√sru（流れ出る）の動

詞として、sru と変更したものと考えられるからである。[6]

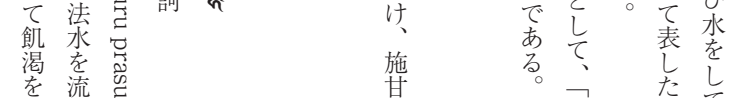
sru も srū のいずれも「甘露陀羅尼」の観文に「能く飲食及び水をして変じて、無量の乳及び甘露と成る。」とあることから、甘露の乳が餓鬼に流れ出る様を真言の意味として表したものと考えられるのであるが、果たして「及水法」の「甘露陀羅尼」の梵字表記でまちがいがないのか。

最初に、この疑問を持ったのは、「施食儀」[7]に「施甘露真言」として、「甘露陀羅尼」と同じ内容のものが、次のような梵字ならびに漢音写で表記されているのを見出せたからである。

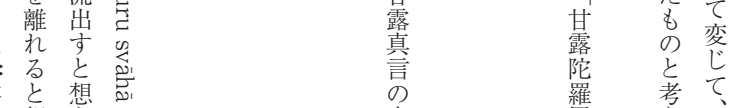
次に妙色身如来施甘露印

或いは施清涼印即ち左羽腕を以て腕を転じて力智を前に向け、施甘露真言の声を作す。

曰く。



那麻 蘇嚕巴耶一答塔葛達耶



怛牒塔三 唵四 酥嚕酥嚕五 鉢羅二合 酥嚕六 鉢囉二合 酥嚕七 莎訶

(namaḥ surūpayatathāgatāya tadyathā oṃ suru suru prasuru prasuru svāhā：筆者補)

真言を誦する時、忍度の上に一の ṁ 鑁字有り、般若甘露の法水を流出すと想え。空中に弾洒して、一切餓鬼異類の鬼神、普く清涼を得て、猛火息滅す。身田潤沢にして飢渇を離れると想え。此れ月密明點本續、并びに須嚕巴本續に出ず。云く。自身、観自在菩薩を心月輪上に想え。白色 ṁ 字を想え。光出でて前の諸鬼神

等を照す。并びに忍度の上に一月輪有り。上に𑖮鑁字を想え、般若智甘露水を流出す。力智弾洒して空中に至る時、細雨の如くして下りて鬼神の身の上に着く、猛火息滅して普く清涼を得る。飢渇を離れて心の障の業に報いることを滅すると想え。（大正二一巻四七七頁下）

と記されている。ここでの観文を見るならば、この真言を誦え、中指の上に鑁字を観じ、そこから般若甘露の法水が流れ出ると観ずるのであるが、さらにその水を弾指して洒水することによって餓鬼たちの身体に降り注いで猛火を消滅させて飢渇の苦しみから救うことが説明されている。ここから判断するならば、先の「及水法」と同様に甘露の水が流れ出る sru の意味合いが取れるのであるが、その後の観文を見るならば、その猛火を消滅させることによって「身田潤沢にして飢渇を離れる」と観想され、妙色の梵字表記 surūpa=suru の意味合いとして見て取ることもできるのである。（surūpa=suru については、後で説明する。）

漢音写は、どちらもほぼ同じ真言の表記とするならば、この梵字表記の相違はどこから来るのであろうか。

2、「及水法」の梵字表記について

まず「及水法」を、もう一度見直してみるならば、この梵字そのものが、本来「及水法」には書かれていなかったのではないか。それは、大正蔵の「及水法」の脚注に「〈原〉黄檗版淨嚴等加筆本、〈甲〉三十帖策子第二十六」[8]と記載されており、そこから、左記のことが明らかになったからである。

まず弘法大師の『三十帖策子』における「及水法」に記載されている真言・陀羅尼には、漢音写のみであり、梵字表記はないこと[9]。

次に「黄檗版」に「及水法」が収められてないことである。そのことについては、東洋大学所蔵の「黄檗版」を確認したところ、目録に記載されておらず、また実際に経典を確認しても収められてなかった。さらに他で所蔵されている「黄檗版」の目録を検索してみても確認することができなかった。[10]

では、大正蔵の脚注に書かれている「黄檗版」とは何を指しているのであろうか。

そこで大正蔵の密教部の諸経典にある脚注をいくつか確認してみると、次のような記述が見出せた。

「黄檗版淨嚴等校訂加筆本塚本賢曉氏藏」

これは、『大日経』[11]の経題に対する脚注である。その他の密教経典にも、この脚注が見られることから、「及水法」の脚注で示されている「黄檗版」も、塚本賢曉氏が所有している大蔵経であることがうかがえる。

塚本賢曉氏は『国訳密教』を編纂しており、その序文から、おそらく豊山の学匠であったことが推察できる。[12]しかし、塚本賢曉氏がどこの寺院の住職であったのか分からず、また判明したとしても果たして「黄檗版」が所蔵されているのかも分からない。残念ながら現段階では、その「黄檗版」を確認することができなかった。

さらに、明治期に出版された［縮刷］と［卍続蔵］に収められている「及水法」を見てみるならば、その冠註に

「霊雲寺校本　海　○此経四本倶闕今對校檗本」[13]

となっており、霊雲寺所蔵の校訂本、すなわち先の淨厳加筆の黄檗本を対校したものと考えられる。「海」とはおそらく空海の『三十帖策子』を示すものか。「四本倶闕」とは、「高麗版」「思渓版」「普寧寺版」「明蔵」を示す。[14]

この霊雲寺所蔵の校訂本を確認するために、霊雲寺関係者に連絡を取ったところ、霊雲寺に所蔵されていた大

蔵経は、関東大震災等によって焼失してしまったとのことであった。[15]

いずれにしても現段階では、「及水法」が「黄檗版」にあったかどうかを確認できなかった。

付け加えるならば、［蔡運辰］に記載されている明治までに開版された大蔵経目録の中には「及水法」が確認できず、さらに不空の事績が書かれた『表制集』[16]においても見出すことができなかった。

以上のことから、「及水法」が中国においては、正式に不空の翻訳のものとは認められていないが、日本においては、何らかの形で大蔵経に収められることになったと推察するものである。

また、「及水法」が不空の翻訳として最初に書かれたものが弘法大師の『三十帖策子』であるが、後に円仁が唐から持ち帰った諸経典の目録『入唐新求聖教目録』にも「及水法」の記載が見られる。ただし、そこでは、「施諸餓鬼飲食及水法并手印不空三蔵口決　一巻」[17]とあり、不空の翻訳ではなく「口決」としていることから、「及水法」が不空翻訳として取り扱うのには注意が必要であろう。

さらに梵字表記の問題に関して、大正蔵密教部の諸経典を調べると、梵字の多くは日本において書かれたものであることが判明した。

例えば、不空訳とされる経典に限っていくつかを見てみるならば、脚注に次のように記述されている。

『金剛頂勝初瑜伽經中略出大楽金剛薩埵念誦儀』（大正二〇巻一一二〇Ａ番）
表題脚注「〈原〉麗本、〈甲〉寛治六年寫仁和寺藏本」
梵字脚注「梵字依甲本加之下同」
『曼殊室利童子菩薩五字瑜伽法』（大正二〇巻一一七六番）

表題脚注「〈原〉麗本、〈甲〉黄檗版淨厳等加筆本」
梵字脚注「麗本無梵字今依甲本載之下同」
『聖迦柅忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經』（大正二一巻一二二二番）
表題脚注「〈原〉麗本、〈甲〉享和二年刊長谷寺藏本、〈乙〉三十帖策子第二十五、〈丙〉文治五年寫高山寺藏本、〈丁〉黄檗版淨厳等加筆本」
梵字脚注「麗本總無梵字今依甲本載之」

このように、高麗版大蔵経中の真言の漢音写に対して、大正蔵では「淨厳等加筆本」と、後に梵字が付け加えられているものが多く見られるのである。

「及水法」についても、「甲本梵字總無之」[18]と『三十帖策子』には表記されない梵字が淨厳などによって書き加えられており、もともと梵字があったとは認めがたい。

この梵字が、誰によって、いつ「及水法」に書き加えられたかを確認することは困難ではあるが、おそらく「施餓鬼法」に関して言うならば、その後日本で作られた『諸尊要抄』、『薄雙子』あるいは『秘鈔』などの真言・陀羅尼には梵字が表記されていることから、これら諸次第に収められている「施餓鬼法」が作成された頃に梵字が表記されたのではないかと考えられる。

以上のように見てみるならば、「及水法」の梵字表記が確実なものではないと言えるであろう。

3、「施食儀」における「甘露真言」の梵字表記について

一方、「施食儀」について見てみるならば、この経典は訳者不明であり、また「金版大蔵経」（十二世紀頃成立）から編入されていること。またこの儀軌は不空訳の『瑜伽集要救阿難陀羅尼焔口軌儀経』[19]の内容を多く引用していることから、この経典よりも後に翻訳されたものと言える。なお、「施食儀」は黄檗版（明本）にのみ所収されており、そこには梵字表記がされている。

また、先の観文の記述の中で「月密明點本續、并びに須嚕巴本續に出ず。」が見られる。ここでの「本續」[20]という表記であるが、よくチベット密教のタントラを「本續」と漢訳することがある。それはタントラ（tantra）をチベット語で（rgyud：相続、タントラ）と翻訳するところから由来するものである。そこから察するならば、「施食儀」はチベット密教が中国社会に浸透してきてから作成されたものとも考えられる。

さらに『月密明點本續』が何の経典かは不明であるが、もう一方の『須嚕巴本續』については、『西蔵大蔵経』の［su r'u pa zhes bya ba'i gzungs（Surūpa nāma dhāraṇī）］（東北目録　五四〇番、一〇七八番）に相当すると思われる。

この経典には、漢訳『仏説妙色陀羅尼経』（法賢訳　大正二一巻一三八六番）があるが、「施食儀」に漢訳の『仏説妙色陀羅尼経』が引用されていないところからも、チベット密教からの影響が大きいと考えられる。ちなみに、チベット訳の［Surūpa nāma dhāraṇī］の真言も、（suru suru）と表記されている。

以上のことから、「施食儀」の梵字表記については宋代以降、チベット密教が中国に影響を及ぼしはじめた頃に付け加えられたものであると考えられる。

4、「甘露陀羅尼」と『仏説妙色陀羅尼経』

次に「甘露陀羅尼」と同様な真言が説かれている『仏説妙色陀羅尼経』について検討する。

漢訳「妙色陀羅尼」

その時、仏は阿難に告げて言わく。陀羅尼有り。名を妙色と曰く。乃ち是れ三世諸仏が同じく倶に衆生に大利益を作すために宣説したまう。若し復た人有って、是の陀羅尼を聞かば、難遭の想いを生ぜども、勇猛心を発す。読誦受持し、供養恭敬せば、この人現世に大福聚を獲て、昼夜安穏なり。復人有って、大悲心を以て、寂静処に於いて、種々の飲食を持ち、生を出すことを為す。此の陀羅尼を七遍誦して、加持しおわりて、是の如き言を作す。「我れ今、生を出し世間の一切の悪趣の諸鬼を祭る。願わくは、此の生を食する者は速やかに悪趣を離れんことを。」是の言を説く時、即ち三つ弾指し、彼の諸鬼が此の食を得ば、各々飽満し、妙なる色身に変じて菩提心を発し、乃至当来に漸く仏果を成ずることを想え。即ち陀羅尼を説きて曰く。

那謨引婆誐嚩帝引一句 蘇嚕播引 野二 怛他引 誐多引 野三 阿囉曷二合 帝引 三藐訖三二合 没馱引 野四 怛鞞切身 他引五 唵引 蘇嚕蘇嚕六 鉢囉二合 蘇嚕鉢囉二合 蘇嚕七 三摩二合 囉三摩二合 囉八 婆囉婆囉九 三婆囉三婆囉十 薩哩嚩二合 必隷二合引 多必舎引 左引 曩引十一 阿引 賀引 囉捺那引 彌娑嚩二合引 賀引十二

(namo bhagavate surūpāya tathāgatāya arhate samyaksaṃbuddhāya tadyathā oṃ surusuru prasuru prasuru smara smara sambhara sambhara sarvapiśācano ākāradanāni svāha)

爾時、阿難仏の説を聞きおわって、歓喜信受し、作礼して退けり。

仏説妙色陀羅尼経[21]

チベット訳　『妙色と呼ばれる陀羅尼』

仏陀とすべての菩薩に帰依します。

namaḥ surūpāyatathāgatāya / arhate samyaksaṃbuddhāya / tadyathā / oṃ suru suru / prasuru prasuru / tara tara / bhara bhara / saṃbhara saṃbhara / smara smara / santarapaya /santarapaya / sarvapretanāṃ svāhā /

この陀羅尼によって、水と一緒の食事に七度唱えられて、左手で三度弾指してから、すべての餓鬼に、寂静処で施し、また次のように唱えるべきである。

「欠点を見つけ、欠点を探して取り除け。すべての世間に住む餓鬼たちにこれらを食べさせることによって、我は布施を為せり。」と。これまで食事を取れなかった者に施すべきである。そのようになすならば、すべての餓鬼に、おのおのが食べる多量の飯をそれぞれに施すであろう。

そのように為すならば、生まれ、生まれ変わっても非力なものとならないだろう。貧乏にもならないだろう。大力にして、美しく（妙色）、見目麗しく、金持ちで多く享受するだろう。長寿にして病気せず、速やかに無上正等覚を現等覚されるだろう。死んでからも安楽世界に生まれるだろう。

妙色と呼ばれる陀羅尼なり。[22]

右の漢訳とチベット訳の「妙色陀羅尼」を比較してみるならば、共通点としては、陀羅尼の功徳によって食が

満たされるだけでなく、多くの福徳ならびに仏陀の悟りが保証されることである。また、作法として、この陀羅尼を唱える際、三度弾指することが説かれているが、チベット訳では三度弾指する際、真言を七遍唱えることと、施食を水と和すことが付加されている。

また大きく相違する点については、陀羅尼の功徳と作法を説く箇所が、漢訳では陀羅尼の先にあって、チベット訳では後に付されている。また漢訳の陀羅尼では、「必舍引左（piśāca）」チベット語訳では（preta）となっている。漢訳については、陀羅尼の功徳に「生を出す」あるいは「生を食す」とあり、ヒンドゥー辞典「必舍引左（piśāca）」が肉を食らう悪魔であることから、[23]ここでの「生」とは、生肉あるいは生命を意味していると考えられる。また、『密教大辞典』の「毘舎遮」の項目では「幽鬼にして、闇蔽の處を好むより厠神とも云はる。大疏十には是極苦楚義、此輩多是餓鬼也と譯せり。」[24]と説明があるところから、餓鬼と同類と解釈している。

以上の点から、「妙色陀羅尼」の救済する対象は、いずれも餓鬼とみなしても差し支えないであろう。

次に、何故「妙色」という名称かと言えば、この陀羅尼を唱えた施食を食べた餓鬼たちは、満足して、妙色なる姿となることが示されていることからくるものと、陀羅尼に「妙色如来（surūpatathāgata）」への帰依が最初に説かれていることによるものであろう。

「妙色如来」については、不空訳の『仏説救抜焔口餓鬼陀羅尼経』に

「那謨婆誐嚩帝素嚕波引耶怛他誐哆野（namo bhagavate surūpāya tathāgatāya）妙色身如来の名号を称え、加持するに由るが故に、能く諸の鬼の醜陋の悪形を破して、即ち色相を具足することを得。[25]」

と説かれている四如来のうちの「妙色身如来」の名号ならびにその功徳から由来するものと考えられる。

以上のことから、「妙色」が意味するものは、一つは如来の姿を示し、もう一つは「妙色陀羅尼」が唱えられ

ることによって餓鬼が救済され、麗しい姿、すなわち「妙色」の姿を得ることができることを示していることが考えられる。

5、『供物鬘』における「甘露陀羅尼」の解釈

次に、「施食儀」と「妙色陀羅尼」に共通して出てくる（suru suru prasuru prasuru）の意味であるが、これに関してチベット大蔵経の『供物鬘（balimālikā）』[27]の中に「餓鬼供物」としての陀羅尼が収められ、尚且つその陀羅尼の意味がチベット語で以下のように付け加えられている。

oṃ namaḥ surūpaya tathāgatāyārhate samyaksaṃbuddhāya /
de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas gzugs mdzes la phyag 'tshal lo /
「妙色なる如来、阿羅漢、正等覚者に帰依します。」

tadyathā / oṃ suru suru / prasuru prasuru / tara tara / dhara dhara /
'di lta ste / gzugs mdzes gzugs mdzes / gzugs rab tu mdzes gzugs rab tu mdzes / 'od 'od / yang dag par 'dzing pa yang dag par 'dzing pa /
「すなわち。妙色よ、妙色よ。すばらしい妙色よ、すばらしい妙色よ。輝け、輝け。よく把持せよ、よく把持せよ。」

smara smara / santarpaya santarpaya / sarvapretānāṃ svāhā /
dran pa dran pa / kun du tshim par gyis kun du tshim par gyis / yi dags thams cad song zhig /
「念ぜよ、念ぜよ。満足せよ、満足せよ。一切の餓鬼に　スヴァーハー。」

このチベット語訳での解釈から、suru は妙色（gzugs mdzes）すなわち surūpa と解釈していることが明確である。

このことから「甘露陀羅尼」の「蘇嚕 蘇嚕 鉢羅蘇嚕 鉢羅蘇嚕」の陀羅尼を suru suru prasuru prasuru の漢音写であり、また suru を surūpa の省略形と解釈し、和訳を「妙色よ」とすることが妥当である。

まとめとして

これまで、大正新脩大蔵経に記載されている梵字について、何も疑いも持たずに、経典が漢訳された当初からあるものとして取り扱ってきたが、今回「施餓鬼法」を見直す機会を得て、その梵字が後世に付け加えられたものであることが明らかになった。このことは、「施餓鬼法」に限らず、おそらく他の経典においても言えるであろう。それゆえに他の経典における真言・陀羅尼の漢音写を見て行く場合も、梵字表記を信頼することなく、その音価について、それぞれの時代と翻訳者とに分けて見直して行く必要がある。

また「施餓鬼法」に関しては、判然としない真言・陀羅尼がいくつか存在するが、チベット大蔵経に多く存在する供養儀軌等の文献を精査することによって、今まで分からなかった真言・陀羅尼の表記が明らかになるきっかけとなるかもしれない。

今回、漢字音写に焦点を当てることができなかったが、少なくとも不空訳とされる儀軌等に見られる漢字音写

を比較し、その漢字の音価がサンスクリット語のどの音に適合するのかを検討する必要があるが、それは時間がかかる作業ゆえに、今後の課題としたい。

註

（1）「甘露陀羅尼」という名称は、後出の「及水法」では「蒙甘露法味真言」「施甘露真言」とし、また「施食儀」では「施甘露真言」。『仏説施餓鬼甘露味大陀羅尼經』（大正二一巻四八五頁下）では「施甘露漿陀羅尼神呪」。その他『薄雙紙』（大正七八巻六四九頁上）と『秘鈔』（二五〇頁）では「甘露陀羅尼」。『薄草子口決』（大正七九巻二九三頁上）では「甘露呪」。『覚禅鈔』（四三二頁上）では「甘露法味印」。また智山派現行『作法集』では「甘露王陀羅尼」、豊山では「甘露陀羅尼明」（［要集解説］二九七頁）と次第によって呼び名が相違しているが、ここでは総称として「甘露陀羅尼」とする。

（2）『薄雙紙』（大正六四八頁中）、『秘鈔』（大正二四五頁）。

（3）大正二一巻九〇六頁上

（4）東北五四〇番、北京三五二番

（5）大正二一巻四六七頁中（漢文書き下しは、［秘密儀軌　九十五頁～九十七頁］による。）

（6）田久保周誉『真言陀羅尼の解説』一〇四頁下段　鹿野苑　昭和三十五年十二月初版。さらに田久保は、「正統梵語の srava と prasrava（pra√sru の命令・二・單）の俗語的活用形」と記述し、sru 自体もサンスクリット文法から逸脱した俗語形と解釈している。

また［縮刷］、［卍続蔵］の梵字表記も、srū srū prasrū prasrū であるが、［縮刷］ならびに［卍続蔵］の冠註に、「srū は sraḥ に作る」とあり、梵字表記自体、後に論ずるように不確実である。

（7）大正二一巻四七七頁下～四七八頁上

（8）大正二一巻四六六頁脚注

（9）佐和隆研、中田勇次郎編『弘法大師真蹟集成』第二帙　法蔵館　昭和四十八年

（10）［大明三蔵］、［仏教大学目録］

（11）大正一八巻一頁脚注

（12）『国訳密教』の最初の所にある凡例で、豊山大学学監荒木良仙をはじめとして權田雷斧等の豊山派の人々に感謝の意を述べている。

（13）［縮刷　秘密部閏十四］七九丁冠註、［卍続蔵　第二冊］四

八二頁上

(14) 會谷佳光『仏教典籍（漢文資料）の調べ方』平成二十三年度アジア情報研修資料 https://rnavi.ndl.go.jp/asia/tmp/H23_asiakensyu_4_aitani_2.pdf

(15) 真言宗霊雲寺派妙極院住職羽生智彦師より確認

(16) 「蔡運辰」一五〇頁。『代宗朝贈司空大辯正広智三蔵和上表制集』大正五二巻二一二〇番

(17) 「施諸餓鬼飲食及水法并手印不空三蔵口決 一巻」円仁撰『入唐新求聖教目録』大正五五巻二一六七番 一〇八〇頁下

(18) 大正二一巻一三一五番四六六頁下脚注

(19) 「甘露陀羅尼」の箇所については、「誦眞言時。想於忍願上有一鑁字。流出般若甘露法水。彈洒空中。一切餓鬼異類鬼神普得清涼。猛火息滅。身田潤澤離飢渇想」大正二一巻一三一八番四七〇頁下

(20) 例えば西蔵大蔵経北京版では、tantra を「本續」を訳している。

(21) 大正二一巻九〇五頁下

(22) Toho.na.101a5-101b3 , Pek.ba.235a2-235a8

(23) [HINDU] 二二六頁

(24) 『密教大辞典』一八四九頁

(25) 大正二一巻四六五頁上

(26) 大正一二巻二一七頁上

(27) Derge. ed., tsha 163b1-4, Peking. ed., po 281a1-4

一次文献

求那跋陀羅訳『勝鬘師子吼一乗大方便方廣經』大正一二巻三五三番

不空訳『仏説救抜焔口餓鬼陀羅尼経』大正二一巻一三一三番

不空訳『施諸餓鬼飲食及水法并手印』大正二一巻一三一五番、[縮刷 秘密部閏十四] 七九丁左 [卍続蔵] 第二冊

不空訳『瑜伽集要救阿難陀羅尼焔口軌儀経』大正二一巻一三一八番

『瑜伽集要焔口施食儀』大正二一巻一三二〇番

法賢訳『仏説妙色陀羅尼経』大正二一巻一三八六番

頼瑜『薄草子口決』大正七九巻二五三五番

成賢『薄雙紙』大正七八巻二四九五番

守覚『秘鈔』「作法」下巻 智山講伝所編集 平成十三年

覚禅『覚禅鈔』大正図像部第五巻

[縮刷]『大日本校訂大蔵経』閏一四、秘密部

[卍続蔵]『卍続蔵経』新文豊出版

Surūpa zhes bya ba'i gzungs (*Surūpa-nāma-dhāraṇī*) Derge.ed., No.540, 101a2-101b3, Peking.ed., No.352, 235a2-8

gtor ma'i phreng ba (*Balimālikā*) Toh.,No.3771, Peking.ed., No.5901,

〈キーワード〉
甘露陀羅尼　妙色陀羅尼　施餓鬼　及水法　施食儀　梵字

二次文献

[田久保] 田久保周誉『真言陀羅尼の解説』鹿野苑　昭和三十五年初版　昭和四十二年　改訂増補再版
[教化資料] 真言宗智山派宗務庁編『智山教化資料　第四集　常用陀羅尼と諸真言』真言宗智山派　昭和四十五年　初版　平成十二年　改訂増補版
[要集解説] 勝又俊教監修『真言宗諸経要集解説』真言宗豊山派宗務所　昭和五十五年
[高橋] 高橋尚夫「施餓鬼とその真言」一八七頁～一九七頁『初期密教　思想・信仰・文化』春秋社　二〇一三年
[秘密儀軌] 上田霊城・大沢聖寛・布施浄慧監修『秘密儀軌大系Ⅳ　施餓鬼法』四季社　平成十五年
[大明三蔵] 南條文雄『大明三蔵聖教目録』南條博士祈念刊行会　一九二九年
[仏教大学目録]『後水尾法皇下賜正明寺蔵初刷『黄檗版大蔵経』目録：一切経の歴史的研究附録』仏教大学総合研究所紀要　別冊目録　二〇〇四年
[蔡運辰] 蔡運辰『二十五種蔵経目録対照考釈』新文豊出版公司　一九八三年十二月
[HINDU] Margaret and James Stutley *A Dictionary of HINDUISM Its Mythology Folklore and Development 1500 B.C.-A.D.1500*